

近海漁業資源の家魚化システムの開発 に関する総合研究（抄録）

イタヤガイの放流適期及び放流場の選定基準

吉尾二郎

大量に採苗されたイタヤガイ種苗を適地に放流し、放流漁場としての有効性を持たせることは、母貝集団の形成に繋がることであり、本研究の目標とするところである。

本課題遂行にあたり、前年度放流群（敬川）の追跡を継続するとともに、大社沖での放流と追跡を行い、若干の知見を得たので、以下に概要を報告する。なお、詳細は大型別枠マリーナランチング計画（イタヤガイ・アカガイ）プロGRESS・レポート（5）、日水研を参照されたい。

概 要

敬 川 放 流 群

- 1) 小型放流貝（ \overline{SL} : 17.3 mm）の再捕は皆無であった。
- 2) 中型放流貝（ \overline{SL} : 47.5 mm）の再捕状況は曳網回次により異なり、放流後の逸散が大きくないことが示唆された。再捕個体に占める生貝と死貝の割合は全体で1:3であるが、量的に多く入網した回次では死貝の割合が大きかった。中型放流貝の成長は、放流時平均47.5 mmのものが1年後に平均80 mmで再捕された。死貝の殻長組成は45~90 mmの幅にあり、放流後の斃死が漸次起っているものと思われた。
- 3) 大型放流貝の再捕は少なく、あっても全てが死貝であった。

大 社 放 流 群

- 1) 小型放流貝（ SL : 10~20 mm）の再捕は皆無であった。
- 2) 中型放流貝は今回調査対象とはならなかった。
- 3) 大型放流貝（ \overline{SL} : 70 mm）の入網は特定回次に集中し、大型貝の大きな移動はないものと思われた。再捕個体に占める生貝と死貝の割合は1:4で、死貝が生貝を圧倒した。成長は、放流時平均70 mmのものが130日後に平均82.5 mmに達した。